

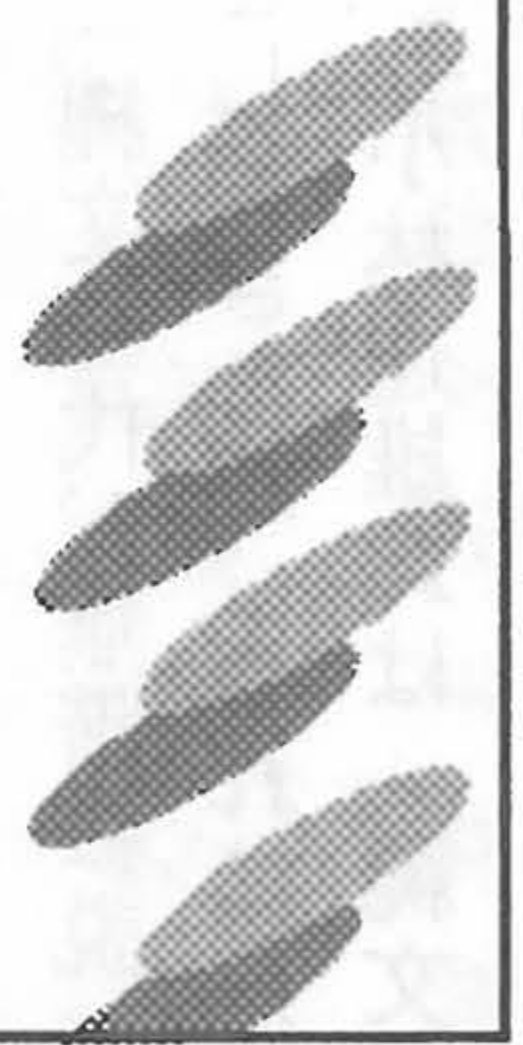
T A O G E N

発行人◎高田かつ子 編集人◎青山富士夫 事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方 TEL 044-522-4185

東京十一年

「新たな論理の冒険」へ

古田武彦



一

「東京十二年」は、一瞬だった。だが、夢にしては、収穫が多すぎる。現にしては、過ぎ去るのが速すぎる。そのような、貴重きわまりない一瞬だった。

その学問的収穫は、今回、三月二十一日の最終記念講義の日の小冊子「学問の未来—歴史学と自然科学との間—」の中で示したとおりだ。「多元的古代」研究会・関東の方々の大きな御協力をえて、出来上がったものである。

四十八項目に分け、各一ページ(A4)の形で簡明に要記した。十二年間の学問的一覧表となった。

だが、すでに原稿とそのワープロが私の手を離れた今、ふりかえってみると、まだ、まだ「あれも、あつた。」「これも。」という思いが走馬灯のように湧き出てくる。その一端を記させていただこう。

二

第一、室見川の銘版。昭和二十三年七月、博多湾岸の室見川の河口近くの西岸で発見された。原末久さん(当時、旧制中学教師)の発見である。

右の小冊子の流儀で列記してみよう。
1 材質は、銅。蛍光X線分析が行われた。(高槻市、理学電気工業)
2 文字は、A周代の小篆、B周代の大家、C漢代の文字、の混用である。
A「高陽左」

”日の出る処”である、倭国の

地を指す。

B「王乍永宮齊鬲」

”倭土は、この地(室見川の上・中流域)に宮殿や重宝を作った。”

C「延光四年」

延光四年(一二五)の五月。後漢の少帝。

D「五」

五月。AまたはBの文字で書かれている。

3 わたしがこの問題を扱ったのは、次の本だった。

A「ここに古代王朝ありき」(朝日新聞社、昭和五十四年刊)

B「風土記にいた卑弥呼」(古代は輝いていた)I。昭和五十九年刊、現在は朝日文庫)

C「盗まれた神話」(朝日文庫、増補版。平成五年刊)

4 わたしは右のAにおいて、この稿の末尾に、次のように書いた。

「わたしの理路は終わった。思うにこれは『論証の危険な断崖』

古田武彦氏著「学問の未来」を全会員に寄贈。

本文中にある、古田氏が退職を記念して、この十二年の成果をまとめて執筆された冊子「学問の未来—歴史学と自然科学との間」を、多元の会関東の全会員の方に同封でお送りします。(余分に「希望の方は高田まで。)

と言えよう。いつもそのような道を一人歩き続けてきたわたしにも、今回ばかりはひととき目くるめくものを感じる。しかし、理路はすでに尽きている以上、『後世』からわたしの論証の非を明証される日がたとい来たとしても、それもまたわたしの望むところだ。」

(昭和五十四年)

当時、室見川流域には、何等の目立った出土物、出土地はなかった。

5 その後、次の出土が報ぜられた。

A 吉武高木遺跡(倭王とその配下の重宝群出土。「最古の三種の神器」をふくむ。昭和五十六〜六十年調査。)

B 神殿群(吉武高木遺跡の東、五十メートル。平成四年出土。)いずれも室見川中流域であった。

6 右の3のCにおける、わたしの理解。

(1) 陽谷(日の出る所)のひがし、この地に王(倭王)は宮殿と宝物を作った。

(2) 今、後漢の延光四年(二二五)五月、この銘版を刻する。

7 「陽谷」の淵源は、日本列島中、ここ関東の地にあったようである。(右の小冊子参照)

8 昨年、札幌へ行った。古田史学の会のお招きだった。道の教育庁の千葉英一さんから、御注意をいただいた。「博多の方では、室見川の銘版の見直しで、大変でしょうね。」と。しかし、何らの反応はない。(多元的古代研究会・九州の方々を除く。)

9 ただし、一つ。福岡歯科大学は、吉武高木のそば(室見川の対岸)にある学校の由であるが、そこからお招きを受け、講義(一回)させていただく。(本年五月十六日)

二

第二、穂高神社(長野県)。昨年、私が当面した「新たな論理の冒険」だった。

1 私は、パラオ島(フィリピンの東)の風俗と、倭人伝の「大人」の風俗との相似から、「南方民族征服説」に立つこととなった。

(右の小冊子参照)
2 「二倍年暦」は、その中核だ。暦は文明の基盤である。

3 一方、阿久遺跡、阿久尻遺跡(長野県)には、「縄文前期前半後半」でありながら、「高床式の木造建築物」と見られる建物が続出している。

4 この型式の建物は、たとえばそれが住居にせよ、食料貯蔵庫にせよ、まさに「南方系」の太平洋諸島にありふれた型式のものだ。(パラオ、沖縄、八丈島等)

5 他方、信州(松本、諏訪近辺)には、「海」にちなむ地名が多い。(島々、島内、海原、小海等)

6 さらに穂高神社には、「お舟祭」と称する祭儀がある(九月下旬)。

7 当地の伝承として、これは海人である「安曇族」が海から来たため、このお祭が行われると、いう。

8 穂高神社の周辺(中・小社)にも、この「お舟祭」は分布している。

9 「安曇野」という信州の地名も、この伝承にもとづく。

10 以上の各要素を、「統一的に理解するための一仮説」を、わたしは提起した。

11 「安曇族、縄文早期末、侵入説」が、これである。

12 この冒険的仮説の背景には、次のような、わたしの年来の立証がある。

A マルクシズムの「適用」によって、考古学界、古代史学界は永らく、「縄文時代、無階級説」を大勢としてきたが、これは非である。(小林達雄氏は「縄文

奴隷」の実例を出された。わたしはそれ以前から、すでにこの立場に立っていた。大阪の朝日カルチャー等。)

B 縄文の黒曜石の産地(和田峠や隠岐島等)は、「武装された地帯」であった。

C なぜなら、もしもそれがなければ、関東や東海からの「交易」によって、和田峠の周辺(松本、大町、諏訪等)が「富む」ということは、ありえない。ただ、やってきて、自分で「掘ればよい」からである。

D 和田峠近辺は、現在でも、道路工事をすれば、多量の黒曜石が出土する。(わたしの深志時代の教え子の証言。)

E 尖石遺跡は、縄文前・中期の繁栄のあと、後期初頭以後、急速に衰退する。それ以前の様式が失われ、周辺(新潟や山梨)の様式にとって変わられる。数も、減少する。

F これは、周辺からの「武力的侵入」によるものである。(尖石という神聖な巨石が「研ぎ石」に使われている。)

13 しかし、今回のわたしの冒険的仮説は、すでに激しい反論に遭うこととなった。

14 それも、当然だ。なぜなら、わたしは肝心の「お舟祭」を現地で見ていないからである。

15 当地には、教え子の諸君が健在。昨年の十一月にも、現地（穂高村）を案内していただき、多くの資料をもらった。有難かった。

16 過去にも、何回か、この神社を訪れたことはあったが、まだ「今回の認識」がなかった。

17 今年の九月下旬、是非、この「お舟祭」を現地で、この目で「見たい」と思う。

18 すでに昨年、現地でこの祭を見、素晴らしい写真をとって提供して下さった。青山富士夫さんに感謝したい。

「多元的古代」研究会・関東の皆さん、本当に有難うございました。京都に帰っても、皆さんのことを忘れるどころか、毎日心中に「東方遥拝」ならぬ、「東方感謝」の礼を捧げているもの、とおぼしめし下さらば、無上の幸せです。さようなら。

へ注）小冊子のワープロは次の方々のお世話になった。安藤哲朗・鴨下武之さん（渡辺和仁さんと御協力）。また印刷については木村由紀雄さんのお世話をいただいた。厚く感謝したい。

古田武彦氏新春講演会要旨（続）

日本の縄文国家と韓国の三種の神器

恒例の多元の会主催、古田武彦氏の新春講演会は一月十四日、文京区民センターで行われました。その前半の要旨は、本誌前号で紹介しましたが、本号にその後半をお知らせします。

裸国・黒齒国、四つの論証

昨年には、大きな収穫がありました。メガーズ博士（エバンズ夫人）

がおいでになり、十日間ご一緒しました。（詳細は「多元」一〇号参照）十一月二日シンポジウムが行われ、翌日学者の方（大貫良夫・鈴木隆雄・田島和雄の諸氏）に集まっていたでいてミーティング（討論）を行いました。十日には二日においでになれなかった方たち（小林達雄・増田義郎両氏）のミニミーティングをいたしました。このように大成功をいたしました。私としてはこの催しを

通じて大きな確信を持つことができました。

私は「邪馬台国」はなかったに於いて、リスクをとまなう論証をして、倭人伝にある「裸国・黒齒国」は、倭人伝の短里・二倍年曆に立つて、南米西海岸にあるとしました。その数年前、エバンズ夫妻・エストラダ氏の研究で、エクアドルのバルデビア遺跡出土の土器と、日本の縄文土器とが大変良く似ている、縄文からの伝播である、という論文をまとめられ、三十年前にスミノリアン博物館から膨大な報告書を出されましたが、日本の学者はこれを無視し続けてきました。

十年前にブラジルの寄生虫の学者のグループが、南米各地に出るモンゴロイドのミイラの中にある糞、あるいは地上の糞の化石から、検出された寄生虫（鉤虫）の卵の分布を研究したところ、アジア、ことに日本列島に多い寄生虫であるという結論が出された。この寄生虫の低温に弱い性質から、ベーリング海峡経由の渡来では説明できず、黒潮によって来たというエバンズ説が支持されたのです。

遺伝子の研究をして、その分布が日本では沖縄・鹿児島・足摺・北海道太平洋岸に多く、中国・韓国・インドネシア・ポリネシアになく、なんと南米の北部・中部の山の中に住む人に濃厚に存在することがわかった。つまりこれらの人達は共通の先祖を持つことがわかってきたのです。

これら四つの研究は、いずれも互いに関係のないところから出発して、いまして、しかも共通の方向を示している、このことを無視することは学問の領域から外れていると言わざるを得ません。

「和田家文書」の真相

「和田家文書」と呼ばれている一連の文書集があります。青森県五所川原市の和田喜八郎さんという林檎農家の屋根裏から出てきたのでこう呼んでおりまして、著者は江戸中期の天才的な武士・学者の秋田孝季を中心に妹・りく、門人・和田長三郎と協同して膨大な文書集が作られました。この和田長三郎の子孫が和田喜八郎さんです。

この内容は非常に驚くべきもので、いろいろな側面を持っています。神社仏閣などに残っていた文書類を

涉獵して写す、塙保己一が『群書類従』でやったような仕事をしたわけです。保己一は江戸幕府をバックにして各藩から出された資料を集めたのですが、各藩、たとえば津軽藩は

天正年間、大浦為信が乱世に乗じて津軽一円を征服し、津軽藩を成立させました。彼はそれ以後の歴史を津軽の歴史として流布させ、それ以前については抹殺、または極力表に出ないようにした。(この事情は各藩とも同様でしょう) それ以前はどうかという、八幡太郎義家に滅ぼされた安倍貞任・宗任の後裔が生延びて、安倍・安藤となり、秋田に移って秋田氏となり、江戸時代には福島県三春町に移って三春藩となりました。戊申の役で勤皇側についたので、子爵になっています。

この秋田氏の一員が秋田孝季でした、津軽藩以前の歴史が消されつつあることを憤り、義父・秋田千季(ゆきすえ)の命を受けて津軽藩以前の歴史を構築する、そのための資料を集める、という作業に乗出したのです。

ですから同じ文書を集めるといつても、藩の前と後との大きな違いがあるわけです。また秋田孝季は各地の古老の伝承を重んじて、その聞書を多く作りしました。アイヌの長老の

話・津軽の人の伊勢詣での話を津軽弁の平仮名で書取るなど、貴重な仕事をしています。そして彼独自の歴史観の形成も行われたのです。

あまり素晴らしい内容であったために、「偽書」だという人たちが現れました。大体従来の定説をあまり鮮やかに転覆させた人に対してはしばしば「偽書」論が出ます。シュリーマンはトロヤの発掘をして素晴らしい業績を挙げましたが、彼が悩まされたのは「骨董屋から買って来た物を発掘したと称している」という悪罵でした。そのため彼は晩年、その対応に追われ、往年の生彩ある活動をできないで亡くなりました。しかしそのことは、彼の発掘がいかに従来のギリシア研究・イリアッド・オデッセイ研究を根本的に覆す、偉大な成果であったかを雄弁に物語っています。

「北斎画譜」を用う

「和田家文書」でも同様に、「偽作」説、中傷・攻撃が起こっているのも、この文書の価値を証明・証言しているものとも言えます。

このような偽作論の中に、「東日流六郡誌絵巻」に載せられた絵が、昭和初年に刊行された画集から剽窃

したものだ、という議論があります。これについては既に昨年発行した『新・古代学』1号の中で根拠を挙げて反論しました。これに関連して

判明したことがありますので報告します。和田さんが私宛てに大量に送って来られた写本の中に、「丑寅日本国史絵巻・六之巻」というのがありまして、その中に、

A、絵を文書に用いる意義について書き、その手本として「絵巻に用いしは次の如くなり。一、北斎画譜、二、豊国□書、三、北雲漫画、四、北溪漫画、五、光琳漫画、六、古帖集、七、英雄画譜、八、鶯村画譜、九、紺紙画譜、十、漫風画、十一、文鵬画、十二、諸国神社絵馬、右を要にして本巻外画載す」とあります。お手本に使ったのはこの十二種類である、この方々にお礼を申し上げますと書いてあります。

B、「右漫画は丑寅日本絵画集に用いられし原画なり。絵師葛飾北斎にしてお赦し蒙りぬ。寛政三年六月十日 秋田孝季」とあります。この前にデッサンが夥しく収録されています。以下「北斎師原画木版」と書かれています。それから作られた絵がありまして、「北極星方針」という説明が書かれています。このようにいろいろな例をあげて、下絵から

これらの絵が作られたことが示されています。

ここで「絵師葛飾北斎にして」とは何でしょうか。しかし「斎」とは、「書斎」などと使われるように、本来「離れ屋」を意味する言葉で、北にあるアトリエを意味する「斎号」だったのです。そのアトリエで北斎に会って、お許しを蒙った、ということとです。このことは昔親鸞研究のとき、彼が同時に使っていた「善信」という名について、龍谷大学の宮崎教授から「それは房号である」と教えられて以来、知識としてはあつた筈なんです。北斎の「斎」も同じ性質の号だったのです。一方、失礼ですが林檎農家の和田さんに、こんなややこしい背景のある造文をやるわけがないのです。

「進化」は中国語訳だった

進化論がチャールズ・ダーウィン以前に和田家文書に現れることで偽作説側が指摘していたことはご存じのことですが、これはチャールズの祖父、エラスムスの業績であることが判明して決着しました。しかし寛政五年ごろに秋田孝季が「進化」という言葉を使っている。孝季が進化論について習ったボナパルトという

人物は、十八世紀末に長崎に来た人でしよう。ところがその記述には通訳として中国人らしい名が書いてありました。このことから「進化」は一旦中国語訳されて日本に来たのではないか、と思われました。もちろん「進化」は日本の学者が初めて訳したことになっていますが……。ところが『丑寅日本国史絵巻』に中国人の書いた文章で、その中に「進化」の文字があります。末尾に寛政四年、明人・楊契仁と書いてある。本来、ヨーロッパの知識は、鎖国していな中国に先ず入っていったので、中国語で入ってきて不思議ではないのです。また明治政府が宣伝したように、明治になって始めてヨーロッパの知識が吸収されたのでもない、江戸時代の長い学習の歴史があって、始めて明治に花開いたのです。

韓国の三種神器

去年の十一月下旬、韓国・光州にまいりました。「多元的古代」研究会・九州の兼川晋さんと一緒に一緒に。理由は光州から三種神器が出土したと聞いたので、調べにまいったのです。目的は十分に達せられまして、趙さんという学芸員の方が大変優秀な考古学者であり、日本の考古

学的状況にも詳しい方でした。これは「咸平草浦里」という遺跡の報告書ですが、もう無くなっていたのを探し出してくださいました。この先頭に三種神器が出ています。

木棺でありまして、三種神器は棺の中にありました。死者の耳に当たる部分に曲玉：ちよつと曲線が少ないですが……。これが耳環であることが証明されたとしております。

腰に鏡と剣があり、脛に鏡と剣、足にまた鏡と剣がある。耳環は一对であるが、鏡と剣は三対あります。鏡は多鈕細文鏡で、腰は三鈕鏡、他は二鈕鏡です。棺の外にはいろいろあり、ことに見慣れない形の鈴楽器が目を引きまます。これは古代韓国でシャーマニズムの宗教行事のための道具であろうとされています。

草浦里と吉武高木の前後関係

韓国側では草浦里の遺跡をBC四〇〇年ぐらいに考えているようです。これに対して日本側の三種神器の一番古いのは吉武高木のBC一〇〇〇年位と考えられています。これが多鈕細文鏡をともなっています。これからいうと光州から吉武高木へ伝播したように見えます。しかし高倉氏の『金印の国家の時代』によると、

草浦里の年代をBC二〇〇〜三〇〇に下げて考えておられるようですし、吉武高木の遺跡がなぜ両端に鈴のついた銅器を欠いているのか、鏡が二鈕鏡なのか、それに対して古いはずの光州が発達した三鈕鏡を含むのか、良くわかりません。で、私は仮説として逆の年代関係を考えて見たいと思う。そうすると他の出土物との関係が整合的になるのです。

それにつけても日本で遺跡の放射能測定が殆どされていない現状は、こういう場合に非常に不便です。博物館でも放射能測定の数字を表示していない所は日本だけでしょう。三内丸山遺跡があれだけ喧伝されながら、やはり測定値が出ていません。これが日本なんですね。

博多の板付縄文水田遺跡の、考古学編年と放射能編年との四五〇年の差（考古学編年ではBC三五〇年とし、放射能測定ではBC八〇〇年、花粉分析等ではBC一〇〇〇年へ誤差あり）となつている。菜畑遺跡でも何百年かの落差があります。放射能測定が正しいとすると、板付だけがずれるのではなく、相対年代で推定しているすべての編年が動いてくるのです。そうすると吉武高木と光州の年代が逆転することもあり得ます。これは断定はまだできません

が、関心をもつて注目していきたい。

倭人の匂い

光州では縄文から六世紀前半まで、ずっと倭人の匂いが漂い続けている。私流の言い方では「倭地」であつたのではないか、ということである。

光州の博物館で、土器を見ました。解説に「日本熊本県のトドロキ・ソバタ式土器である」と書いてある。つまり熊本県の縄文土器と同じ物が光州で出ているのです。

並んで黒曜石の鏃が置いてある。解説がないので趙さんに尋ねますと、「佐賀県の腰岳の黒曜石です」と明快に答えられました。私が見ても確かにそうだと思います。腰岳文明圏は九州一円だけでなく、ここ光州にも及んでいたのです。

弥生時代になりますと甕棺（ミカカン）が出てきます。これは以前に聞いていましたので趙さんに尋ねますと「あれは倭人の墓です」という単純明快な返事でした。この弥生時代に、草浦里の遺跡もあるのです。光州では前方後円墳を二つ見せてもらいました。一つは農家のそば、われわれが見たら全く前方後円墳以外の何者でもない、中期の典型的な前

方後円墳です。一つは工業団地造成の中に出現したもので、二割ほど壊されていますが、大部分は残っています。嶺南大学で調査していました。出土物もあって、六世紀前半。比較的新しい前方後円墳の領域である。六世紀前半までというのが面白いので、後半には任那日本府の滅亡という問題が起きます。それまでは少なくとも前方後円墳が造られている、ということなのです。

わたしは『山海経』の「蓋国は鉅燕の南、倭の北に在り、倭は燕に属す」の書き様から、朝鮮半島の南半部は倭と呼ばれていた、即ち倭地であったというテーマを出しました。のちに百済がこの地に建国しますが、その時までこの地にいたのは、腰岳文明圏の倭人であったのです。くりかえし申しますが、わたしはどんなイデオロギーにも荷担しません。イデオロギーによって考えるの

は本当の学問ではない。一切のイデオロギーから手を切らなければ、学問が人類のために役に立つことはない。それがわたしの一貫した信念です。偏狭な民族主義に捉われずに、日本の侵略は侵略として見、これはこれで事実として見るべきです。大袈裟なことを申しましたが、意のあるところをお汲み取り下さい。

【訂正】前号講演要旨のうち、第2ページ上段「千福寺洞穴」は、「泉福寺洞穴」の誤り。第5ページ2段目「一年生が矢を射ることはありません。」という所は、記録の誤りでしたので削除してください。

(まとめ安藤哲朗)



古田武彦氏パラオを探訪

古田武彦氏は、本紙前号の講演録に報じたとおり、「江戸時代パラオ漂流記」(高山純著)により、ミクロ

ネシアのパラオ諸島に、一年を雨期と乾期に二分して数える習慣があったことに注目された。すなわち、魏志倭人伝の解釈から提起された「倭人の二倍年歴」の由来がそこに認められるのではないかとする着想である。

氏は退職前の忙しい日程を縫って、三月十三日より十九日まで、事実を確かめるためパラオ島を探訪、その状況を、二十一日、昭和薬科大学における最終記念講演の冒頭で、以下のように報告された。

パラオ島のアラカベサン(地名)という山地にある墓地に行きますと、やや新しいお墓があり(写真を回覧)その表を見ますと、故人の氏名とともに、一八二五年生まれ、一九七七年死亡と刻んでありました。まこととすると、百五十二才ということになります。考え

られることではありません。これは、本人が生前に自称していた年齢、つまり一年に二つずつ年をとった数を、そのまま逆算して墓に記銘したものと思われました。

その他、博物館でパラオ語の辞書を作っておられる、年配の女の方に(日本語で)お話を伺いましたが、六カ月を一年とする風習は近年まで行われていたが、現在はなくなっているとのことでした。空港で耳にした会話の中でも、その話がありました。：：今後は気象庁に行つて、同じような気候のある領域を調べたいと思つています。

以上、いずれ正式な報告があると思いますが、とりあえずホットニュースとして報告します。(編集室)

つまり、樹の医学、というわけだ。

だから私はいつも、樹木の気持ちになつて害虫防除を考えている。

樹木に大きな害を与える昆虫は、数多くの昆虫の中のごく一部にすぎない。研究対象となる昆虫の種類も、特殊な一群にかぎられてくる。だから、昆虫一般のこととなると、私の知識もアマチュアの域を

アマチュア森林学のすすめ

私は、もともとは森林昆虫学という学問分野を専攻する研究者であった。森林昆虫学というのは、樹木に害を与える昆虫の生活をしらべ、害虫から樹木をどのように守るか、を研究する学問なのである。

述べておられます。その内容は、ア

「アマチュア森林学のすすめ」と題する一書があります(一九九三年、八坂書房刊、二〇〇〇円)。著

者西口親雄氏は、歴史とは畑違いの農学博士、森林昆虫学の専門家ですが、東北大学農学部を定年退官された機会に、「森のアマチュア」になろうと志したと言われます。そしてその理由を同書のあとがき

(編集室)

脱しない。研究の目標は昆虫学そのものではなく、最終目標は樹木の健康なのである。

しかし、個々の樹木の健康は、生活の場である森林社会が健康でなければ維持できない。森の生態系が健康的に機能していることが必要なのである。樹の医者は、昆虫だけを研究しては任務を果たせない。そのことに気づいて、私の関心は、森の生態系のすべての構成要員にむけられていく。そこに、どんなルールが働いているかを探ろうとする。昆虫だけでなく、森のなかに生息している、さまざまな昆虫をしらべる。しかし、それだけでは満足できない。昆虫を食べる野鳥をしらべる。哺乳動物もしらべる。だんだん専門分野からはみ出してくる。しかし、満足できない。樹木をアタックしてくるカビや細菌もしらべる。これは樹病学の分野だ。もう完全に私の専門外だ。しかし、まだ不十分だ。第一、昆虫や動物の餌である樹木や野草についても、それなりの知識がいる。枯れ木を分解するきのこにだって、無知では困る。最近はどうとう、水のことまで考えるようになった。森と

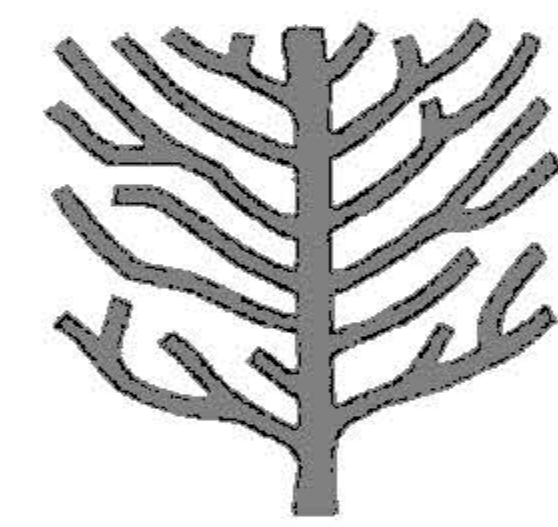
まざまな研究分野があり、それぞれの専門家がいます。樹木の専門家、野草の専門家、きのこの専門家、蝶の専門家、蛾の専門家、甲虫の専門家、土壌動物の専門家、病原菌の専門家、さらに育林の専門家、土壌の専門家、水の専門家、水生昆虫の専門家、防災の専門家など、数えればきりがありません。さらに、国有林の独立採算制を論じるには、森林経営学や林業政策学など、社会学系の知識もいる。森に関する学問には、こんなに数多くの専門分野があり、専門家がいます。しかし、どの専門家も自分の専門分野を離れると、もう一人のアマチュアとかわからない。つまり、「森」の専門家というものは存在しないのである。

私の専門は森林昆虫学、しかし私は昆虫の専門家をめざしたのではなく、森林の専門家をめざしたのだ。だがそれは、無謀な試みだった。たとえば、森林に関する研究者

集団に日本林学会があり、研究発表誌として、日本林学会誌がある。さまざまな分野の研究が報告されている。しかし最近では、各分野とも高度に専門化して、林学会員の私ですら、自分の専門分野以外の論文は、読んでも理解することさえ難しくなってきた。これでは、森の専門家になるのは、もう不可能なことだ。私は、森の専門家になることをあきらめ、森のアマチュアになることにした。アマチュアなら、気楽にものがいえる。大学は定年でやめてしまったから、周囲の評価は気にすることもない。こう割りきると、森の研究はとても楽しいものになった。そしてできたのがこの本である。それぞれの分野の専門家が読んで、怒るかもしれない。馬鹿らしくて、笑うかもしれない。それで結構。しかし笑う専門家として、どれほど正しい森林観をもっているだろうか、疑問だ。森という宇宙を理解するには、すべての分野について、自分なりの見方をもちなければ、自分の森林観は構築できない。

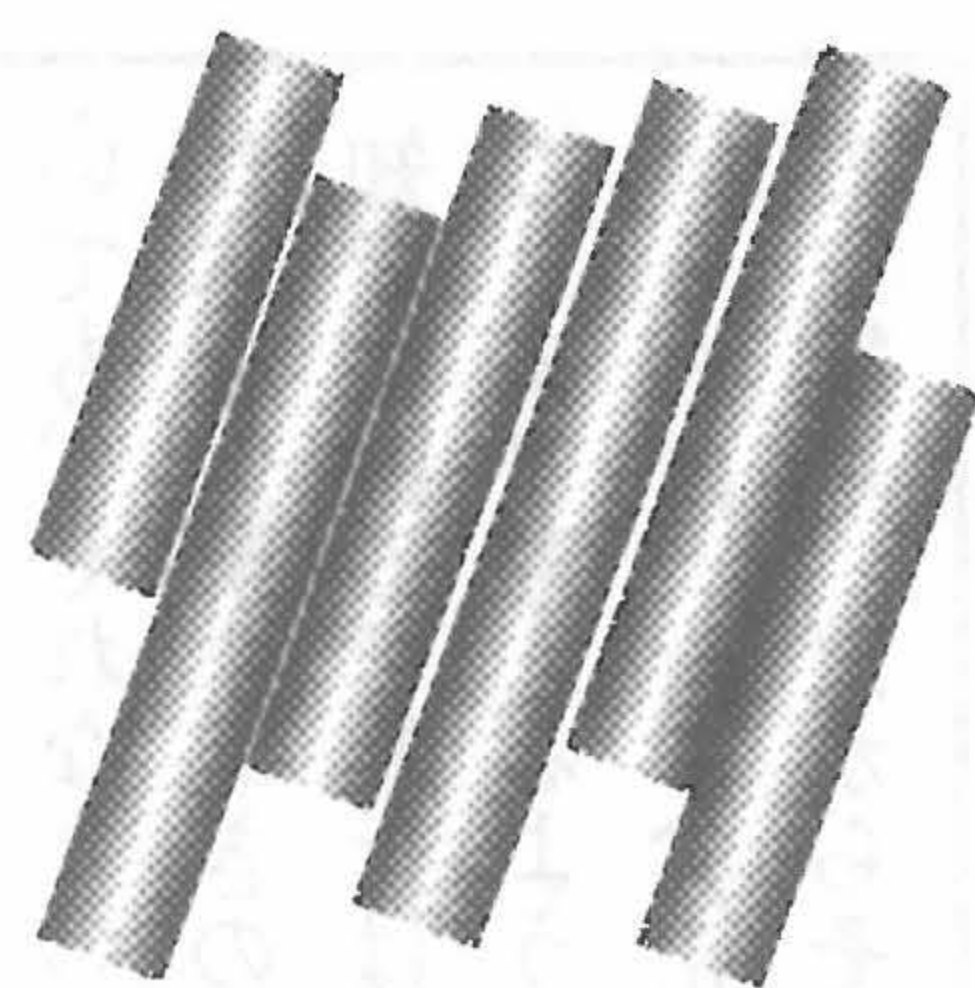
HISTORIAE

学問における 専門家とアマチュア



西口親雄著
「アマチュア森林学のすすめ」より

そこでみんなにすすめたい。森の研究をはじめるところから始めるのとよい。そして、観察したことを、考えたこと、おもしろいアイデア、なんでも発表すること。アマチュアの言葉で、となりの別のことを研究しているアマチュアにもわかる言葉で。そうすると、みんな森の全体像がみえてくる。そうすれば、森のせまい分野しか知らない専門家よりは、よほど森のことがわかってくる。森のことは森の専門家に聞け、という。しかし、森の専門家に聞いても、すっきりした答えはかえってこないだろう。当然だ。森の専門家なんていないからだ。みんな、森のある部分の専門家にすぎないからだ。…(以下省略します)



山田宗睦

日本書紀講座

第十六回

祖先はアマテラスかスサノヲか

第六段の本文には一書が三つある。アマテラスとスサノヲの「誓ひ」の話がテーマであることは共通している。

まず注目されるのはアマテラスの表記法である。第一と第三の一書は日神、第二の一書は天照大神と表している。スサノヲの表記は三つとも同じだが、本文の初出（第五段）はオオヒルメノムチであってアマテラスではなく、高天原、ツクヨミなどもアマテラスの表記の違いに対応してそれぞれ書き分けられているようにみえることは、先に北川和秀論文で紹介した。

第一の一書と第五の本文は同じ系統の史料で書かれていることをうかがわせるが、これは古事記、日本書紀の系譜論へつながる問題でもある。最近、若い学者を中心に両者は

では、「物根」を持ち出して男神と女神を取替え、ニニギをアマテラスの子孫としてしまった。

第一の一書では、アマテラスは女神たちを筑紫に天下らせ、天孫を助けろという。しかも、道の中へという。この道は第三の一書から海の道であるといえる。これが宗像の三神である。第二の一書では、始めはアマテラスが剣を、スサノヲが玉を持っていたが、それを交換させることによって男神をアマテラスの子とする伏線を引いている。

ここには二つの大きな問題がある。一つは本流と傍流の問題、もう一つは海の道の中が、北九州↓沖ノ島↓韓国、というコースの存在を示唆することである。

本流、傍流の問題は古田さんが出されたもので、ご承知のように倭国の本流は九州王朝、神武はその傍流であり、後に傍流が本流を制する形で日本は統一されたとする。しかし、ニニギの祖先はアマテラスかスサノヲか、第六段の本文と三つの一書では思わせぶりな処理がなされている。神武は傍流とは言い切れないことを物語っているのではないか。海の道への言及は、天孫が海の北から、つまり狗邪韓国、伽耶の地からやってくることに、ニニギは天下りではな

く、海からやってくることに、そして博多湾の日向の地に上陸することにつながってくる。この辺りは、日本古代史の問題とされるところを書紀自身が問わず語りに白状しているようなもので、非常に重い意味を持っていると思う。

ここでは、アマテラスとスサノヲの微妙な関係が多面的に照らし出される。スサノヲとは何者か、そして宗像の三女神の実像は？私は、昨年末に宗像大社を訪れたこともあり、新たな関心が湧いてきた。

それにしても、テキストでは「大夫」の読みが「ますらを」となっていたことに何の問題も感じなかったが、山田先生はこれでは士大夫の意味になり、日本の歴史の中では具体性を欠くと指摘され、読み方に疑問を呈されたことには驚いた。講義ならでは、と思つた次第である。

(木村 由紀雄・記)

次回は4月14日(日)午後一時半

【お知らせ】

山田宗睦全注解「日本書紀・史注」(仮題) 全30巻 風人社刊 年末ごろ刊行開始予定で、6月には内容案内ができる、とのこと。

広開土王碑拓本展

見る

小金井市 鴨下武之

二月八日から三月二十日の間、東京国立博物館で、広開土王拓本展が開催され、小生も古田先生の『失われた九州王朝』をポケットに入れて出掛けた。

李進熙氏が「碑文を日本軍閥が都合の良いように改変した。」と主張している中で「本来無い四文字を『来渡海破』と創った。」という部分が自然にポイントとなる。

出品されている中で、入手が一番古いのは、酒匂本（1881～1883拓出）で、李氏が碑文改変の原点としているものである。この碑が発見されたのが一八八〇年（明治一三年）であり、その直後の拓本ということになる。ただし、これは「墨水廓填本」といい、説明文では、「碑面に紙をあてて拓本をとり、その拓本を見ながら文字を解釈して別紙に写し取ったもので、正確には拓本とは呼べない。」とある。確かに他の拓本と違って、字の輪郭は明確で、バックは綺麗に墨で塗られ、全く石の地肌が見えない。この方法をとるならば、

もつと自由自在に変造出来た筈だと思ふ。この資料は、「最初に拓本を取った人が、各々の字をどのように解釈したか、ということが分かる。」という意味で重要である。

次の水谷本（1887～1889拓出）は原石拓本で、荒い凝灰岩の地肌に罫線も拓出されているが、文字の判読は困難になる。先の四文字の内、「破」ははつきり読めるが、他の三文字はおぼつかない。その後に来る、「百残新羅」の「新」の字は、酒匂本では右側の傍の部分のみが明確に出ているが、ここでも微かに分かる。

「表面を石灰で補修した後には拓本を取る方法は一九〇〇年頃から始められた。」と説明文にあるが、東大文学部本（1900～1910拓出）はその直後のもので、地肌は罫線も消されて滑らかで、「来渡海破」は明瞭に読めるが、「新」の傍の部分は消えている。

最後に内藤確介本（1927～1929拓出）があり、石灰拓本と表示しているが、相当に剥離していて、罫線なども出ている。例の四文字は「来と破」は読め、「新」の傍の部分も確認できる。

写真は、一九〇九年以前に撮影した、京大のものと一九一三年撮影の東博ものがあり、京大のものには、

拓本をとって商売していた人と、足場のようなものが見える。

その他、広開土王の墓と比定されている古墳や、そこから出土した丸瓦、銘文甃、碑周辺の風景、同時代の石碑の拓本等が展示されている。それと、説明資料に、出展された四種の拓本のコピーが、それぞれA1サイズで四枚ついて、僅か五〇〇円であった。今そこから、「倭」を数えたりして楽しんでいる。

刻文字陶片

見る

小金井市 斉藤里喜代

三月一日朝日新聞夕刊に「中国四〇〇〇年前の文字? 新発見の刻文、神奈川で展示」という松丸道雄東大名誉教授（中国古代史）の報告が載った。

それによると相模原市立博物館の「江南の至宝展」に江蘇省龍虬庄出土の刻辞陶片が出陳されていて、発見者の張敏氏（南京博物院考古学研究所長）の話では河南龍山文化の晚期か、夏の始めのものと考えているという。

時期はほぼ四〇〇〇年前で、一九九三年一月三日「中国最古の文字か」

として朝日新聞で報道された、山東省鄒平県出土の陶片（十一文字が刻まれている）とほぼ同じか、あるいはやや遅れる程度という。

展覧会は三月十日までというので、富永長三氏に誘われて、三月三日約十名で問題の陶片を見てきた。思ったより小型で、黒く、付いている虫めがねも倍率が小さく、はつきり見えない。

脇に展示してあるカラー写真では、はつきり四つの文字らしきものと四つの絵らしきものが見える。会場には、朝日新聞を読んできて来館したグループが多い。その記事に、一九九三年報道の山東省出土の陶片は甲骨文字とは無関係で漢字に先行する古文字だと松丸氏は同年に発表した。九四年に中国の馮時氏が、彝（い）族文字で読めると発表した。（病を得て）祖先神・洸（とく）に祈り、鷄骨をもって占うといった卜辞であるという。彝族とは現在雲南、四川、貴州省などに居住する少数民族だそうで、その文字は後漢くらいまでさかのぼれる、と考えられてきた。

殷周文化（＝漢字文化）が支配的になるより、さらに約八百年前、山東方面で彝族が最も先進的な文化（山東龍山文化）を持ち、文字を用

いていたという。馮氏は彝夷(い)で山東方面にいた東夷であつたらうとする。

中国の二つの陶片は、山東省とその南江蘇省から出土していて、その南はさらに古い河姆渡文化等がある。そしてそれらは海を挟んで、縄文中期の日本文化の対岸である。今まで絵や文様とされてきたものも、ほとんど文字として認識されるようになれば非常におもしろい。時代は

新しいが、日本製の銅鏡の文字のよななものというのも、正しく日本の文字として認識すれば読めるのではないかと思う。

三月八日の朝日新聞に「弥生の数字？」という記事が出た。岡山の弥生中期の南方遺跡で謎の記号が刻まれた剣形木製品が出土し、大学教授がコメントしているのだ。結縄刻木の刻木ではないかと私の夢は広がる。

定例活動の報告

まとめ 富永長三

発表と懇談の会

二月四日に発表された内容を阿久津恒也氏にまとめていただきました。同じく同日行われた下山昌孝氏の「東北の古代官衙遺跡調査」に関する報告は、追って紹介する予定です。

江釣子古墳群と蝦夷塚の謎

阿久津恒也

北上市にある江釣子古墳群は、北上川の支流・和賀川北岸の段丘上に営まれている群集墳で、地元の人達は蝦夷塚と呼んでいます。東

にしています。

群集墳は和賀川北岸の段丘上に、川原石を積み上げて築かれ、山石は全く使われておりません。また、南岸には一つも発見されておりません。古墳の直径は六、十五メートルの小さなもので、遺体はすべて和賀川に向けて葬られています。遺体の左側に蕨手刀などの武器、右側に馬具、鏃、斧が並べられ、頭上にはガラス玉、勾玉などの装身具が置かれています。和同開珎銭が発見されているので、七世紀後半から八世紀初頭にかけて築造されたと推定されています。

長沼古墳三号墳からは、鉄刀三口のほか勾玉、切子玉、水晶製丸玉、ガラス製丸玉が多数出土しています。その中にガラス製金張が含まれており、ガラス玉の上に金張りし、さらにガラスで覆った精巧な装身具です。このゴールド・サンドイッチ・ガラスは国内で三例目の発見で、古代オリエント様式を伝える珍しいものであり、江釣子にどのような運ばれてきたのでしょうか。

この蝦夷塚は考古学では、変形横穴式石室と呼んでいます。その理由は、遺体を葬った石郭部の足元に空間があり、それを羨道部と認められたからです。石郭の横穴とされる部分は

石積みされてふさがれており、遺体を運び入れる高さもありません。重葬された形跡も認められません。どうして変形横穴式古墳と呼んだのか分かりません。山石を使っていないことや積石方法を見ると、縄文時代からの伝統的な配石様式のように感じられます。

北上川の中流域は名実ともに蝦夷Ⅱアイヌ語族の居住地です。東夷Ⅱ蝦夷征服を目指した近畿王権は「王化に浴せぬ、荒ぶる、伏(まつ)ろわぬ者」と位置づけ、東(あづま)から東北へ侵略を拡大したのです。その記録は「景行紀」以降、歴代の天皇紀に載せられています。が、「斎明紀」になって増加します。従って、この時代から征夷の積極化が図られたのでしよう。しかし、具体的な戦闘記述が何もないので、実際には天武・持統朝から開始されたのではないのでしょうか。「書紀」記録の再検討が必要だと思われれます。

万葉集と漢文を読む会

東歌。相変わらず珍論卓説飛び交って、春風駘蕩。そのうちに古代東国の生活者の姿が、身の回りに近くようです。

漢文は「隋書」高麗伝。ゆっくり

と倭国に近づきつつあります。
 次回は4月28日(日)

古田ゼミナール 3月1日

「学問のすすめ」をめぐって

今回は最終回とあって多数の参加を得、また和田喜八郎さんもお見えになり、賑やかな会になりました。お話は「祖訓大要」からの新発見でした。

祖訓大要

壺儀

北斗流鬼国・久利流・千島・日高
 大州より、東日流日高見国を以て日本中央となせるは荒覇吐国にして、日輪の下古代より歴史栄ある日下王国なり。

太古を尋ねれば安日彦王を以て第一世となし、累代を安部・安東・秋田氏たる姓氏を移して、その末胤を三春五万五仟石秋田氏に継ぎて一系たり。(中略) 荒覇吐の一族は累代にして非理法権天を覚り、常にして平等一光の天日に崇め、人をして吾が一族の生々に人の上に人を造らず、亦人の下に人を造るべからずと曰ふ祖訓を護るこそよけれ。(中略) 荒覇吐神と曰ふ吾らの神は、人の生々流転に安らぎを與へたるはな

し。心の安らぎを道に聞くものをして撈々も楽しからじや、安心立命なりやと曰ふなり。

右は安部国東の遺訓なり。

原漢書なるを釈す。

寛政五年六月吉日 秋田次郎孝季

注而

右渡島阿吶寺蔵書写也。

末吉再書

福沢諭吉は『学問のすすめ』で「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云えり」と記した。

諭吉の創作にあらず、他からの引用の証明であった。だが和田家文書もまた同じ筆法であった。

「祖訓大要」には「……亦人の下に人を造るべからずと曰ふ祖訓を護るこそよけれ。」と記されている。そして右は安部国東の遺訓なり、と孝季は記している。安部国東は二二七代の人、前九年の役で有名な安部次郎貞任は二二二一代、国東はそれより四代前だ。さらにこの文言は「日本將軍安部安国状」(『東日流六郡誌全』)にある。安国は二一九代、平安初期の人だ。またこの文言が『東日流外三郡誌』が強調するその祖、安日彦・長髓彦の説話にはなく、この時代に出現することもその真実を証明している。平安時代前期、近畿

天皇家の東北への圧力は安部氏の本拠地に及ぶ。天照大神と荒覇吐神との対立、異宗教・異文化の衝突だ。そこから生まれた思想、その表現が先の文言だ。福沢諭吉はそこに気付いてはいなかった。只文明開化の飾りとしてその文言を利用した。和田家文書の平等思想と福沢諭吉のそれは、一見似て非なるものであった。(『真実の東北王朝』第六章参照)

写本によれば、末尾、末吉再書の部分が、明治己巳年末吉再書とある。己巳年とは明治二年だ。一方の『学問のすすめ』は明治五年二月の出版である。先後は明らかである。和田家文書真実の証明である。

さてこの写本には末吉の署名があった。しかし本文は末吉のものではない、末吉より上手い。末吉は書の上手に清書させ自署名した。何の為に、それは誰かに見せる必要があった。誰かとは。それは福沢諭吉の可能性が強い。またこの筆跡は長作に似る。しかし長作ではない、長作では年齢的にも合わない。それでは誰か、その謎は標題の祖訓大要の下にやや小さく書かれた壺儀、によって解ける。壺儀とは私儀、と同じ用法である。末吉に清書を依頼された人物は、礼を守って私(壺)が書せてもらいました、の意で壺儀、と小さく書いたのであろう。しかし和田家には壺、と名乗る人物はいなかったという。それでは誰か。書の上手で長作よりも年長者、末吉が門外不出の文書の清書を頼める親しい人。その人は長作の手習いの師匠ではないか。長作が上手であったのも偶然ではあるまい。さらに、この写本と同じ筆跡の文書が他にもある。その一つが福沢諭吉の手紙だ。諭吉の手紙でありながら末吉の花押が描かれている。その点もあって偽書攻撃の標的にされた文書だ。この問題も「祖訓大要」の書写者の解明によって解けてきた。

和田家文書の偽書攻撃、それはシユリーマンのトロヤ発掘に対する欧米学界の攻撃と同質のものだ。トロヤ発掘は、トロヤ神話の真実を証明した。このことは同様に世界の他の地方(インド等)の神話の真実を保証する。それはキリスト教こそが唯一の真実であるとする欧米文明国の思想と衝突する。同様に天皇一元主義に塗り潰されてきた日本列島の歴史観と和田家文書の思想とは両立しない。

秋田孝季は度重なる外国旅行を通じて、白人による先住民への差別的支配を見聞した。和田家文書、それは世界に誇り得る思想である。

関東史跡散歩の会

虎塚古墳（関東の代表的な装飾古墳）
内部公開の日を機会に見学会を行います。

▼4月13日（土）

▼集合場所／午前6時50分 上野駅10番線、ホーム前より。7時2分発高萩行乗車—常磐線勝田駅9時33分着
▼第二集合場所／茨城交通湊線勝田駅ホーム。9時43分阿字ガ浦行乗車—中根駅下車、徒歩15分で虎塚古墳
*次の特急でも間に合います。上野発（17番線）7時30分—勝田9時、または8時—水戸9時20分—乗り換え9時26分—勝田9時33分
▼コース／虎塚古墳、十五郎横穴群、馬渡埴輪製作遺跡ほか

お問い合わせは富永まで。
電話03(3308)1971

5月の発表と懇談の会

萩原法子氏に再び

「オビシヤ」を聴く

当会では昨年三月、民俗学研究家萩原法子さんに、珍しい三足カラスの登場する関東のオビシヤ行事の話の話を聞きました。今春は古田先生の要請もあって、会員が手分けして当行事の探訪も行い、一層関心が深まってきましたので、再び萩原さんをお招きしてお話を聞きます。

▼題／カラスの出ないオビシヤ

▼5月6日（月） 午後1時

▼文京区民センター

多元の会 カレンダー

4月

会場は全て文京区民センターです。

4日（日）午後1時
発表と懇談の会
話題提供／下山昌孝氏「中東の古代遺跡見聞録」、富永長三氏「敷石住居遺跡展を見て」

13日（土）
関東史跡散歩の会／虎塚古墳見学

14日（日）午後1時30分
山田宗睦「日本書紀講座」
講義終了後、希望者による天智紀以降（岩波文庫版5）の輪講を行います。

21日（日）午後3時～7時
懇親会「古田武彦氏を送る夕」

28日（日）午後1時
万葉集と漢文を読む会

5月

6日（月）午後1時（連休最終日）

発表と懇談の会
ゲスト／萩原法子氏
「カラスの出ないオビシヤ」

12日（日）午後1時30分
山田宗睦「日本書紀講座」

26日（日）午後1時
万葉集と漢文を読む会

事務局便り

「古田武彦氏を送る夕」

締切りました

古田武彦氏は既報のように今春昭和薬科大学を停年退職され、京都の自宅に転居されることになりました。多元の会としては、在京中の先生のご指導に感謝し、あわせて研究の一層の発展を願って、送別懇親の会を左記により行います。

当日は、参会者より先生に、記念品として「プラトン全集」ギリシヤ語版とネーム入り原稿用紙をさしあげます。

全会員にご案内のはがきをさしあげたところ、すでに定席（65名）をオーバーする申し込みがありましたので、締切らせていただきました。ご了承ください。

▼4月21日（日）午後3時

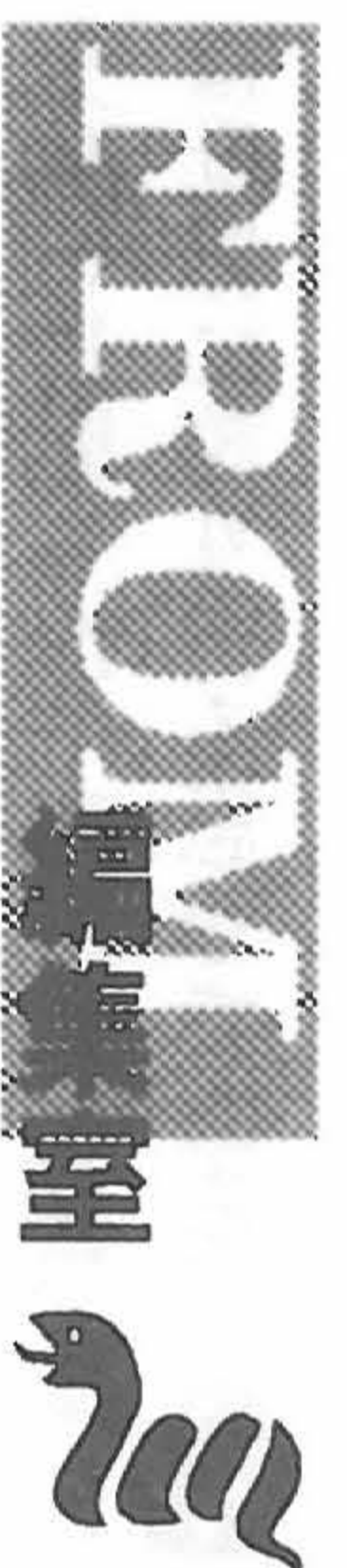
▼文京区民センター

新年度会費納入のお願い

本会の年会費は、「四月より翌年三月まで」となっております。継続会員の方でまだ平成八年度の年会費（四〇〇〇円）を納入されていない方は、同封の郵便振替にてお振り込み下さい。連絡が行違いました方は、ご容赦ください。

新規にご加入の方は、別に入会金一〇〇〇円をいただきます。住所氏名、電話番号明記の上、左記へお振り込みください。

▼（振込先）「多元的古代」研究会・関東、口座番号00170・9・768777



本号のFROMでは、一見歴史学とは縁のなさそうな農学博士西口親雄氏の文を再録させていただきました。歴史学でも、部分部分の研究が進歩し、精密になるのはいいことですが、その反面で「人間の学」としての歴史全体を見通す眼が希薄になっては困ります。その意味では専門家には警鐘を鳴らし、アマチュアにも勇気を与える、達意の文章であると考えた故です◆ちなみに、通しタイトルとしたFROMでは、最古の歴史書といわれるヘロドトスの著作に由来しています。彼はギリシヤ人でありながら、ギリシヤの価値観だけに捉われることなく、広く地中海世界各地の歴史を、客観的に記述することにとめました。その態度が歴史思考の根本精神ではないかと思えます◆次号より「多元」編集長が交替いたします。この会が急遽発足して以来二年間、若年のころのいささかの経験に頼りに、何とか重責を果たしてまいりました編集者も、なにぶん大正生まれの老骨、校正の眼元も霞むようになりましては、老兵去るに似かずと覚悟いたしました。ご愛読を感謝するとともに、次号よりの、新鮮なメンバーによる活発な誌面にご期待ください◆会員の皆様の投稿、ご寄稿などは、とりあえず、会長または事務局あてにお送りください。（魁）